

## なし紅粒がんしゅ病の発生が多い

～ 早期に樹体検診し発病部の除去を行いましょう ～

### 1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

本年4月中旬の巡回調査における主枝の発病枝率は0.2%（平年0.3%）、同地点率は18.2%（平年13.1%）でいずれも平年並だったが、11月中旬の巡回調査では発病枝率が5.9%（平年3.2%）、同地点率は81.8%（平年61.4%）でいずれも高かった（表-1）。

11月22日に仙台管区气象台から発表された3か月予報によると、12～2月の気温と降雪量はいずれもほぼ平年並と予報されている。

本病は秋～翌春（10月～翌年4月頃）に、分生子子座と子のう殻から胞子（分生子、子のう胞子）が大量に飛散する（図-1）。

以上のことから、せん定の切り口、ねん枝時や凍寒害などによる傷口からの感染が増加し、翌年以降の発生量が多くなると予想される。このため早期に樹体検診を実施し、発病部を除去する必要がある。

### 2. 防除対策

#### 1) 耕種的防除

一般的に発病部は木質部まで感染が進行しているため、発病枝は病斑部と健全部の境界から基部方向に30cm程度切り戻す。側枝に病斑が確認された場合は、根元から間引く。骨格枝上に病斑があるため切り戻すことができない場合は、木質部が褐変している部分を完全に削り取る。発病部の除去は直ちに実施し、遅くとも12月中に終える。

せん定した枝は園内に置かず、適切に処分する。樹勢の低下により発生が助長されるので、栽培管理を適正に行う。特に凍害部からの感染が多いため、凍害防止に努める。

#### 2) 薬剤防除

発病部の切り戻しや削り取りの跡にはトップジンMペーストの原液を塗布する。また、せん定の切り口、ねん枝時に生じた傷口などにも予防としてトップジンMペーストの原液を塗布し、感染を防止する。

### 3. 資料

表-1 巡回調査における紅粒がんしゅ病の主枝発病の状況

	4月中旬		11月中旬	
	発病枝率	発病地点率	発病枝率	発病地点率
2022	0.2	18.2	5.9	81.8
平年	0.3	13.1	3.2	61.4
概評	並	並	多	多



図-1 秋期に形成された分生子

#### 【 問合せ先 】

秋田県病虫害防除所 TEL 018-881-3660

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224

天王分場班 TEL 018-878-2251

掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>